

私はさよならの残像

作
折田

登場人物

ソフィー
フィロ
ラブ
ユーシー
オカン
黒縄先生
衆合先生
阿鼻先生
ベリー
さよなら配達員
母親

不登校の女の子。
ソフィーの落とし物。へんてこりんな天使の格好をしている。
ソフィーの親友。
星の国へ行ったソフィーの先輩。
近所の駄菓子屋の店主。
ソフィーの担任。
ラブのクラスの担任。手持ちのベルを持ち歩く。
2年の担任。
ラブの後輩。
誰かがかつて忘れたものを配達する人。
ソフィーの母親。

1 夜。ソフィーの部屋

つけっぱなしのテレビでドラマが流れている。
チャイムの音。

さよなら配達員の声「お届け物です。ソフィーさん」

玄関から配達員の声。

もう一度チャイムが鳴る。

ソフィー、椅子に座り眠っている。

さよなら配達員、ソフィーの部屋の窓の外までやってくる。

さよなら配達員 「ああ、もしもし。起きれますか。すみませんこんな時間に」

ソフィー 「ううん……」

さよなら配達員 「私もさすがに申し訳ないとは思うんですけど、仕事なので」

ソフィー 「はあい……」

「あの、伝票をお荷物に預けておくので、受け取りのハンコ押して天界
ポストにいれておいてくださいねー。お届け物到着から一週間以内の
伝票の投函よろしくお願いします」

ソフィー 「どうもう……」

「不要であれば伝票は破棄して構いませんので。それでは、失礼します」
ソフィー 「にやい……」

「ねえ先生、失恋って、大好きな人に振られることじゃないんだよ。大
好きだったひとのことをだんだん好きじゃなくなっていく、恋を失
っていく、その過程のことを失恋って言うんだよ、本当は。だって相
手に振られたくらいで恋を失えるはずがないでしょう」

テレビの声 「そうかもな」

「私、いままでにたくさん恋をしてきたわ。そしてその度に失恋したの。
ちゃんと失恋してきた。やっぱりね、だんだん相手のことを考えるこ
とが少なくなっていくって、相手に対して抱いていた好きって感情が
なくなる 때가、一番寂しい。振られたときなんかよりもうんと。先
生はそんな経験ある？」

テレビの声 「さあ、忘れてしまったな。ずっと昔にはあったかもしれないが」

テレビの声 「そっか。私ね、失恋する度に、胸に手を当てて涙を流すの。そして恋
心の残像に別れを告げるのよ」

テレビの声 「恋心の残像？」

テレビの声 「ええ。ほら、私たちってね、勘違いしやすいんだよ。今の恋心と、過

テレビの声
テレビの声

去の恋心を。そして過去の恋心に囚われて、それを今の恋心と勘違いしてしまう。でも本当はそうじゃない。あなたを好きなこの気持ちがある。ただの過去の恋心の残像だってわかってようやく、人は失恋するの」「なるほど」

「あなたは私の恋心の残像。さようなら、私の残像って、これからもきっと、何度も別れを告げるんだわ」

ソフィーが目を覚ます。

ソフィー 「ヤバい、寝てた」

ソフィー、双眼鏡を覗き、ノートに何か書き込む。
ドラマは続いている。
スマホが鳴る。

ソフィー 「もしもし。うん、今やってるよー。え、寝てない寝てない。うそ、寝ちゃった、ちょっとだけね。今日はそうね、金星がよく見える。あと流れ星。こりゃあ願い事し放題だよ。え？ああ、なんかね、どっかの国では流れ星が流れてるうちに3回願い事が言えたら願いが叶うって迷信があるんだって。分かる、私も最初聞いたときなんだそれって思ったもん。でもロマンティックで素敵じゃない。ラブならそういうと思った。わかってるよ、今日は3時までには寝るって。うん、そりゃ頑張るよ。就職は星の国でしたいしさ、これも立派な就職活動だよ。ははは、うん。うん、明日昼過ぎね。待ってる。あ、お菓子ないから適当に買ってきてくれない？ごめんね。ありがとう、それじゃ」

電話を切る。

双眼鏡を覗き、ノートに書き込む。

テレビの声
テレビの声
テレビの声
テレビの声
テレビの声
テレビの声
ソフィー

「そろそろ帰らなきゃ」
「ああ、もうそんな時間か」
「私が帰るの、惜しい？」
「何バカ言ってるんだ。さっさと支度しなさい」
「素直じゃないんだから。先生、さようなら」
「はいはいさようなら。気をつけて帰れよ」
「嫌なドラマ」

テレビの声
テレビの声

「全く、ほんと手のかかる奴」

「着実に近づく2人の距離。禁断の片想いは実るのか？次回、わたしはさよならの残像。この恋の結末を見逃すな」

ソフィー

「私は、さよならの、残像」

ラッパの音が鳴り響く。

ラブ

「わたしはさよならの残像」

黒縄先生

「わたしはさよならの残像」

衆合先生

「わたしはさよならの残像」

ベリー

「わたしはさよならの残像」

オカン

「わたしはさよならの残像」

ユーシー

「わたしはさよならの残像」

フィロ

「わたしは、さよならの残像」

ソフィー

「わたしはさよならの残像」

全員

「わたしはさよならの残像」

舞台上、ソフィー、ラブ、フィロが残る。

ソフィー

「なにこれうんま。なにこれ」

ラブ

「発売開始前から話題になってたんだよね。虹の味をイメージしてつくられたレインボーチョコレート」

ソフィー

「ふうん。バズるってやつ」

ラブ

「SNS見ないソフィーには縁のない世界だったね」

ソフィー

「私にはテレビと星で十分。これさ、美味しいけど、正直虹の味かはわからないわよね」

ラブ

「まあね」

ソフィー

「虹って誰か食べたことあるのかな」

ラブ

「さあ。ユニサスとか？」

ソフィー

「ユニサスってあの馬みたいな珍獣だっけ」

ラブ

「間違いじゃないけど馬扱いはユニサスがチギレするから気をつけな」

ソフィー

「ユニサスと会うことなんてそうないから大丈夫です。ご心配どうも」

ラブ

「どういたしまして」

ソフィー

「でユニサスって虹食べるの？」

ラブ

「知らない」

ソフィー

「なんだ。ま、ユニサスが食べたことあっても感想聞けないよね」

ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ

ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ

ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ

ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ

ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ
ラ
ソ

「お気に召していただき何よりです」

「知らない」

「それ音だけだからおもしろくないんじゃないの？」

「でもラブその時間テレビ付けない」

「そうでしょ。ってかおもしろくないならチャンネル変えればいいじゃん」

「とか言って実はそのドラマ観たいんでしょ」

「そのとおり」

「なにそれ。SNSやってないくせに」

「ええ、なんで」

「ふうん？ラブその気持ちわかんないや。嫌いなら視界に入れないのが一

「そうだね。そのマインドで全人類が生きれたら平和になるのにな」

「まあそういうことだね」

「そうだね」

「座右の銘あげるってなんなのよ。何個あるのよ」

「もらえるほどないじゃん。とりあえず聞かせて」

「いいじゃん。続けてどうぞ」

「キュン死に一生」

「なんて？」

「キュン死に一生」

「九死に一生？」

「違うよお、キュン死に一生だよお」

「なるほどね。座右の銘は有言実行にするよ」

「えーラブのどっちも気に入らなかった？」

「そのドラマさ、めっちゃめっちゃさよならって言うんだよね」

「アハ、キャッチボールの球急に変わってウケる」

「妙に耳障りなはずなのに、今日は何回さよならって言うんだろうってついテレビ付けちゃう」

「あー、嫌いなんだっけ」

「うん」

「さよなら」

「うん」

「学校来なくなったのもそれが原因のひとつなんだっけ」

「めっちゃめっちゃ大げさに言えばそう」

「なんか聞いても変な話だね」

「気まずいじゃん。さよなら、バイバイ、また明日ねって挨拶したあとに、下駄箱でまたすれ違ったときのあの雰囲気。さっき別れの挨拶は済ませちゃったなあ、もう一回言うの変じゃないかなあ、でも無言はもっと変だよなあってぐるぐるぐるぐる考えるあの時間」

「考えすぎだよー」

「ラブはどうしてるの？」

「うーん？考えたことないから分かんないや」

「えー」

「ラブそれより、そっちの方が気になるな」

「そっち？」

「ソフィー全然紹介してくれないんだもん、幽霊じゃないよね？」

「幽霊？」

「そっちそっち」

「ああ」

「誰それ」

「知らない」

「怖いよ」

「でもこんなのは持ってた」

「こんなの？」

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー 「こんなの」

フィロ、伝票をラブに見せる。

ラブ 「さよなら配達の伝票じゃん」

ソフィー 「さよなら配達ってなに？」

ラブ 「遺失物配送のことだよ」

ソフィー 「ああ、遺失物配送」

ラブ 「ラブのまわりの子がさよなら配達って呼んでて、そっちのほう呼びやすいからラブも使ってるの」

ソフィー 「さよなら配達。ふうん、さよなら配達ね」

ラブ 「人が配達されるなんて聞いたことないけどなあ」

ソフィー 「わたしもないよ」

ラブ 「いつ届いたの？」

ソフィー 「知らない。気がついたら家にいたんだもの」

ラブ 「怖いよ」

ソフィー 「遺失物配達にも不在票があれば良いのにね」

ラブ 「さよなら配達で再配達なんかないよ。だってその人が家にいるときにしか荷物が届かないようになってるんだもん」

ソフィー 「でも寝てたんだもん」

ラブ 「時間帯が悪かったね」

ソフィー 「神様は人間の睡眠という行為をもうちょっと考慮してくれないものかね」

ラブ 「神様だからなあ。時間なんて気まぐれなんだろうね」

ソフィー 「その神様の気まぐれで、私の元に人間が届いたってわけ」

ラブ 「ねえ、あなたはだあれって本人に聞いてみたの？」

ソフィー 「聞いたよ」

ラブ 「ちゃんと優しく聞いた？」

ソフィー 「別に普通に」

ラブ 「聞き方怖かったんじゃないの」

ソフィー 「なんでよ。普通だってば」

ラブ 「ふうん。それでなんて？」

フィロ 「私はあなただったもの」

ソフィー 「らしいよ」

ラブ 「なにそれ」

ソフィー 「わかんないよ。だったものって何？」

ラブ 「つまりソフィーは昔ソフィーを落としちゃったってこと？」

ソフィー 「欠陥なんてありません」

ラブ 「内臓とか」

ソフィー 「どうやって落とすのよ」

ラブ 「手術で取ったりしたことは？」

ソフィー 「生まれてこのかた病院のお世話になったことがない元気っ子です」

ラブ 「すっごーい。確かにソフィーが風邪ひいてるところも虫歯に苦しんでるところもワクチン打ったって話もニキビ治療したって報告も聞いたことがなーい」

ソフィー 「生まれてこのかたお肌はとうるつとうるです」

ラブ 「うらやましい」

ソフィー 「不登校ゆえにストレススリーな生活を送っております」

ラブ 「センチティブゆえにいいって良いのかわかんないネタだよ」

ソフィー 「私は気にしない」

ラブ 「よ、ガラスのハート」

ソフィー 「防弾ってこと？」

ラブ 「そうだね。そうかもね。でもソフィーがほんとにシンデレラのガラスの靴くらい繊細だったことラブは知ってるよ」

ソフィー 「それまあまあ強度あるくない？」

ラブ 「えうそ、じゃあ今のなし」

ソフィー 「ラブのなかではガラス細工ぐらい繊細って解釈なのね」

ラブ 「うん。優しすぎるんだぞ」

ソフィー 「そんなことないわよ」

ラブ 「そう返すだろうなってことも知ってる」

フィロ 「私は優しくない」

ソフィー 「うわ入ってきた」

フィロ 「なぜなら私を落としてしまったから」

ソフィー 「自分を落としたことなんてない」

フィロ 「私を落としてしまったわ」

ラブ 「やっぱり体の一部なんじゃ」

ソフィー 「怖いこと言わないでよ」

ラブ 「ほら、今までに切ってきた爪とか抜けた毛とかフケとか血とか汗とか涙とかおしっこといろいろあるじゃん」

ソフィー 「そんなもんいちいち遺失物配送で届いてたらヤバイでしょ」

ラブ 「ま、そうだよ。神様そこまで暇じゃないよね」

フィロ 「私はあなたが落としてしまったもの。あなただったもの。思い出して、

さあ」

舞台、大きな波の音に包まれる。
フィロとソフィー、見つめ合う。
水中にいるようだ。
こぼこぼと音が鳴っている。
ソフィー、もがく。

ソフィー 「ふはっ」

苦しそうに浅い息を繰り返す。

ラブ 「どうしたの？」

ソフィー 「わからない」

ラブ 「苦しいの？」

ソフィー 「わからない。でも、苦しくてたまらなかった気がする」

ラブ 「たまらなく苦しいのにわからないの？」

ソフィー 「わからない。今は苦しくない」

フィロ 「苦しいはすがない。だってあなたは私を落としたんだもの」

ソフィー 「あなたは何なの」

フィロ 「あなたは私。あなただったもの。あなたの優しさであり苦しさであったもの」

ソフィー 「それじゃわからない」

フィロ 「しかしそれが事実。私はあなたの優しさであり、苦しさであり、あなたがあの日落としてしまったもの」

ソフィー 「わからない」

フィロ 「わからないんじゃない。わかってほしいだけ」

フィロ、部屋の角に座る。

ラブ 「あーあ、拗ねちゃったんじゃないの」

ソフィー 「わからないものはわからないんだもの」

ラブ 「それもそうだ。あ、ソフィー、さっきの伝票はやいとこサインして天界ポストに投函しときなよ」

ソフィー 「え、送らなきゃいけないの？」

ラブ 「だってその場で受け取りのサインしてないんでしょ？」

「してない」

「だったら受け取りましたって証拠送らなきゃ。そうじゃないと荷物回収されちゃうんだよ」

「そうなの？」

「らしいよ。まあだいたいその場でサインしちゃうから、知らない人も多いみたいけど」

「私みたいに」

「ソフィーみたいにね。しかしさすがラブなのだ、恋のキューピッドを目標してるだけのことはあります」

「そっか。就職先天の国希望だもんね」

「そうなのだ。だから天の国事情についてはみんなより勉強しているのだ」

「ふーん、サインしなきゃ回収ね」

「期限は一週間か二週間か三週間だったかな」

「どれかな」

「そこまでしつかりとはさすがに覚えてないよ。今度聞いとくね」

「誰に？」

「ラブの担任の先生。またの名を衆合先生。またの名を天の国の師匠」

「またの名を多いよ」

「ラブの情報源は師匠なのだ」

「あの先生詳しいんだ」

「そうなのだ」

「いつもベル持ち歩いてカランカラン鳴らす変な人だとばかり思ってた」

「その認識全然間違いないのだ」

「天界ポストってこのへんにあるんだっけ」

「ないのだ。一番近いところでも電車で2時間はかかると思うよ。忘れないうちに出しに行っちゃいな」

「そうだね、まあ、うん。いや、やっぱ、こわいよ。だってこれ何かわかんないんだよ」

「でもソフィーの落とし物なんですよ？」

「そうだけど、これが本当に私が今までに切ってきた爪とか抜けた毛とかフケとか血とか汗とか涙とかおしっこだったらどうするのよ。いらないわよ」

「ソフィーったらやだあ。そんなのがこんなかわいい姿に変身して戻ってくるとかないよお」

「もれなく全部さっきのあんたが口にしたラインナップよ」

「ま、猶予はまだあるし、受領書送るのはこの子がソフィーのなんなのか

分かってからでもいいかもね」

「そうする。色々質問の仕方変えてみるよ」

「そうしな。ね、この子お菓子は食べるのかな」

「試したけど飲みも食いもしないみたい。人間に見えるけど人間ではないのかしらね、やっぱ。羽まであるし。天使かも」

「羽？」

「私はあなた」

「天使なんてそもそも持ってたことすらないけどさ」

「たしかに天使みたいに可愛いとは思うけど、羽って、意外にメルヘンなところあるじゃん」

「は？何が？」

「照れんな照れんな」

「照れる要素が分かんないわよ。お菓子もうなくなっちゃうけど追加で買っていく？」

「そうだね。なんもないと味気ないしい」

「オカンのお店でいいよね」

「わー、もちろん。私の憧れ元キューピッドのオカンさん」

「憧れねえ」

2

オカンの駄菓子屋。

大阪のおばちゃんを体現したようなオカンがカウンターに座っている。

駄菓子屋に、フィロ、ソフィー、ラブがやってくる。

オカン

「いらつしやい。ああ、ラブちゃんとソフィーちゃんか、今日もごつつい若くて羨ましいわ」

ソフィー

「憧れねえ」

ラブ

「きゃー！いつ見ても素敵！」

オカン

「ゆっくり見てってちょうだい」

ラブ

「はあい」

ソフィー

「私は未だにオカンが元キューピッドなんて信じられないよ」

ラブ

「えー？あの凛々しく慈愛に満ちた眼差しなんてまさに理想的な恋のキューピッドじゃない？」

ソフィー、オカンを見る。

オカンは虚無の眼差しでどこか遠くを見ている。

ソフィー

「わからんわからん」

ラブ

「オカンさんのキューピッド時代、見てみたかったなあ。きっと恋の弓矢は百発百中なんでしょうね。狙ったハートは逃がさない、射貫くまで追いつめる鋭い眼差し」

ソフィー

「スナイパーじゃん」

ラブ

「まさに絵画の一部を飾るにふさわしい姿だったんでしょね」

ソフィー

「その絵画は見てみたい」

オカン

「ラブちゃん、アタシばかりじゃなくて、お菓子も見えてや。いっぱい買って帰ってな」

ラブ

「はあい。いっぱい買って帰ります」

オカン

「ウチのお菓子は全部アタシが恋のおまじないをかけたものからなあ。ま、恋のおまじりみたいなもんや。食べれば食べるだけ効果があるかもしれへんし、まあないかもしれへん。そのあたりは人によるからなんとも言えんな」

ラブ

「いっぱい食べなあす」

ソフィー

「その商売元キューピッド的にいいんだろうか」

ラブ

「いっぱい食べなきゃね、ソフィーも！」

ソフィー

「え？ いや、私は別にいいわよ」

オカン

「なんやソフィーちゃん、恋してへんのか」

ラブ

「遠距離なんです。好きな人が星の国に就職しちゃって。で、ソフィーも星の国に就職できるように、毎日星観察頑張ってるんですよ！ね、ソフィー」

ソフィー

「え？」

ラブ

「え？」

ソフィー

「え？」

ラブ

「ほら、ユーシー先輩」

ソフィー

「ああ、ユーシー、先輩」

オカン

「遠距離はなかなか寂しいもんやな。遠距離やったら、その流れ星キヤンデイがおすすめや。舐めてる間相手のことを考えてたら相手もアンタのことを考えてくれるかもしれへん。効果は人によるけどな」

ラブ

「超いいじゃん。ソフィーこれ買つときな」

ソフィー

「いいよ。私には必要ない」

ラブ

「ラブの前では意地張らなくていいんだぞ」

ソフィー

「意地じゃなくて、私ほんとうにもう好きじゃないだけよ」

ラブ

「でも、それ、本気で言ってる？」

ソフィー
「うん」

ラブ
「うそ」

「なんでラブに嘘つくの。ユーシー先輩のことは、確かに好きだったし、今でも良い人だって思ってる。星の国に就職したいって進路も先輩がキッカケ。星観察の楽しさを教えてくれて感謝してるし、また会いたいとも思うけど、もうこれは、この感情は、ラブが思ってるものとは違うものだよ」

ラブ
「……そっか、ごめんね、押し付けちゃった」

ソフィー
「ううん。ありがとう」

ラブ
「苦しかったよね。乗り越えてえらいよ、ソフィー」

オカン
「ほお、そおかそおか。なんや青春やな、ちよっと眩しすぎるわ」

オカン、サングラスをかける。

ラブ
「ワイルド、素敵！」

ソフィー
「スナイパーじゃん」

「渾身のボケやねんけどな、これ。滑ってもうたからいい話でもしよかな」

ラブ
「きゃーん。オカンさんがいい話してくれるって、ソフィー」

ソフィー
「名誉挽回しようとする元キューピッド嫌だなあ」

オカン
「人間はみな、キューピッドの矢に導かれ恋をする。これもう授業で習ったんかな」

ラブ
「あつ、はい。小学生の頃に習いました」

オカン
「キューピッドは恋に落ちる心の働きは促すんやけどな、赤い糸を生み出すのはあくまでも自分たちや。2人の間に糸ができひんかったら、またキューピッドは適当なタイミングで矢を飛ばす。そうして人はいつか赤い糸が小指から紡がれるまで、何度も恋をしながら大人になっていくんや」

ラブ
「ああ、なんて素敵な話なの」

ソフィー
「教科書で読むより元キューピッドから言われる方が説得力あるね」

オカン
「ま、あくまでも矢はランダムに刺さるから、一生恋をしないなんてケースもあるのはもう神様の気まぐれとしか言いようがないけどな。ソフィーちゃんは、少しずつ大人になっていってるんやねえ」

ソフィー
「大人に、なっているのかしら」

オカン
「ほんの少しずつな。しかしそれにしては」

オカン、フィロを見る。

オカン

「神様も野暮なんか気まぐれなんか、こんなもん返してきたんか。ははは、まあまあ、アンタも頑張り。流れ星キャンディ1個あげるわ。普通に美味いねん。食べてみ。いつも最良してくれてるお礼や」

ソフィー

「ありがとうございます」

オカン

「ま、恋つてのは、良いもんやな。アタシこれでもな、成績めっちゃよかってんで。神様からもらった指示を百パーセントこなす凄腕やったわ。ずっとキューピッド続けると思ってたのに、なんやこんな小さな駄菓子屋の店主なんか好きになってもーて、仕事辞めて、せっせと赤い糸紡いでもーた。誰や、アタシに矢を飛ばしたんは。感謝しかないよ。結局主人は先に逝ってしまったわけやけど、それでも今ここにおれて幸せやからな。ラブちゃんも、良いキューピッドになりや」

ラブ

「はい、オカンさんみたいな立派なキューピッドになってみせます」

オカン

「うん」

ソフィー

「あ、せっかくなんで、流れ星キャンディ、いただきますね」

オカン

「うん。食べてみ」

ソフィー、流れ星キャンディを食べる。

周囲、瞬く間に夜空に変わる。流れ星が飛んでいる。

ソフィー

「あ、流れ星」

ユーシー

「ソフィーも見た？」

ソフィー

「ユーシー先輩も見えましたか？」

ユーシー

「バッチリ。願ひ事は唱えられなかったけど」

ソフィー

「星に願うんですか？」

ユーシー

「うん。どこかの国では、そういう文化があるらしい」

ソフィー

「へえ、変わった文化ですね」

ユーシー

「まあボクたちにとってはね。願ひ事の海があるからそう感じるんだろう」

ソフィー

「海も妖精の気まぐれですからね。星に願うほうが確実なら、私も星に願

いたいな」

ユーシー

「ソフィーは何をお願いするの？」

ソフィー

「やだな、ナイシヨです」

ユーシー

「こっそり教えて」

ソフィー

「絶対言いません」

ユーシー

「無粋だったね。聞きません聞けません」

ソフィー

「先輩が教えてくれるなら、場合によってはいいですよ、教えても」

ユーシー「お、言ったな」

ソファイ「場合によってはですよ」

ユーシー「ボクはねえ、星の国に行くこと、かな」

ソファイ「星の国。先輩、星の国に行きたいんですか」

ユーシー「ああ。だから毎日星観察をしてるんだ。神様が星の国への就職を認めて

くれますようにって、星に願ってはみるんだけどね。流れ星には追い付けないや」

ソファイ「願い事の海にはお願いしたんですか？」

ユーシー「うん。去年、遠足で行ったときに。でも妖精の気まぐれってね、女の子を鼻屑するって噂があつてさ」

ソファイ「妖精最低じゃないですか」

「まあまあ彼らにも好みはあるさ。だからボクは星に願いつけるんだ。ずっと星を見ていれば、それだけ好きだって伝われば、神様だって認めてくれる。それで、ソファイの願ひ事は？」

ソファイ「……やっぱり今は言えません」

ユーシー「おや残念」

ソファイ「でも、いつか聞いてほしいです」

ユーシー「もちろん。ボクでよかったらいつでも」

ユーシー、望遠鏡を覗き込む。

ソファイ、そんなユーシーを見つめる。

舞台からは星空が消え、ファイロとソファイが残される。

ソファイ「今日は曇っててあんまり見えないな」

ファイロ「何が？」

ソファイ「星よ。ま、見えなくても辛抱強く覗かなきゃね。それくらいしなきゃ神様に認めてもらえないもの」

ファイロ「認めてほしいの？」

ソファイ「当たり前でしょ。私、就職は星の国以外にする気ないから。でも、お母さん1人残して行くのも、ちょっと悩んでるのよ。きつと着いてはきてくれないわよね。この国が好きだから」

ファイロ「そうだね」

ソファイ「せめてアンタがお母さんの傍にいてくれるならいいんだけど。だってアンタは私なんですよ」

ファイロ「自分自身とは離れられない」

ソファイ「内臓ひとつお母さんの傍に置いていくようなもってことね。そりゃ無

理だわ」

ソフィー、星を見る。

ソフィー「ねえ、アンタ夜はどうするの？」

フィロ「何が？」

ソフィー「寝るの？」

フィロ「あなたが眠るなら、私も眠る」

ソフィー「ああ、そう。わかった。布団いつこしかないけど私同士なんだから我慢してよ」

フィロ「何が？」

ソフィー「何がって。アンタどこで寝るつもりなの？」

フィロ「どこか」

ソフィー「どこよ。変な子。私なのに」

フィロ「何が？」

ソフィー「もう。いいからはやく寝てよ」

フィロ「あなたが眠るなら、私も眠る」

ソフィー「私はまだ寝ないわ。星を見るもの」

フィロ「あなたが眠らないなら、私も眠らない」

ソフィー「めんどくさいわね。じゃあ起きてなさいよ。あ、ねえ、テレビつけてくれない？」

フィロ、慣れない手付きでテレビをつける。

テレビの声「——て、やってきたのは芸術の国。ここではあらゆる芸術家が日々腕を

磨いています。おや、あれは、彫刻でしょうか。何をつくっているのか少し聞いてみましょう。すみません、お時間よろしいでしょうか？」

テレビの声「はい、どうぞ」

テレビの声「こんにちは。何をつくっているのかお伺いしても良いでしょうか？」

テレビの声「あなたにはどうみえましたか？」

テレビの声「はい？」

テレビの声「正解はないんです。あなたがそう見えたものが、あなたにとっての答えになるんですよ」

テレビの声「はあ、そうですね、私は翼の生えた卵焼きに見えます」

テレビの声「人の作品を卵焼きとはどういう了見だ！」

ソフィー「フツ。なにこのひとめちゃくちゃね」

フィロ 「これ消す？」

ソフィー 「消せなんて言っていないわよ」

母親の声 「まだ起きてるの？」

ソフィー 「もう寝るよ」

母親の声 「はやく寝なさいよ」

ソフィー 「もう寝るってば」

フィロ 「あなたが眠るなら、私も眠る」

ソフィー 「まだ寝ない。テレビだけ消して」

フィロ、テレビを消す。

ソフィー、再び双眼鏡を覗く。

ソフィー 「この世界のどこかに、天才の国っていう、天才だけの国があるんですつ

て。そこはね、神様に認められた人間が行く場所ではなくて、この国のように色んな人々が住んでいたのよ。でも、天才が凡人を抑圧するようになって、それから天才の国と呼ばれるようになったんですって」

フィロ 「そこにはどんな天才がいるの？」

ソフィー 「あらゆる分野の天才よ。凡人は天才の下で不自由なく暮らしてる。ま、おとぎ話みたいなものね」

フィロ 「そんな国があったとしたら、きつとすぐになくなってしまっうね」

ソフィー 「どうして？天才が管理してる国なんだから盤石じゃないの？」

フィロ 「人は自分より優れたものを怖がるから。いつか凡人が天才を殺すときがくる。そうなったらその国は、凡人の国。他の国と変わらない。天才の国では、なくなるの」

ソフィー 「わからないよ。天才のほうが数が多かったら、凡人に勝ち目はない」

フィロ 「それはない。天才というのは、凡人よりも数が少ないようになっている。神様がそう決めたから」

ソフィー 「神様の気まぐれってやつ」

フィロ 「何が？」

ソフィー 「アンタがここに来たことよ」

フィロ 「神様は気まぐれなない。すべては決まりごと。私がここに来たことも」

ソフィー 「そう。じゃあこち来て一緒に星を見よう。さあほら、見るだけでいいわ、観察記録なら私がつける。アンタも私なら星の知識はあるのかしら。あつちでパチパチ光ってるのは何星か分かる？」

フィロ 「何が？」

ソフィー 「もう。あれは花火星よ。じゃあつちの緑に光ってる星は？」

フィロ 「何が？」
ソフィー 「あれは嫉妬星。自分が何かに嫉妬していると点減が多く見えるんだって」

フィロとソフィー、並んで星を見ながら、星の話をする。

3 昼過ぎの休日の教室。

黒縄先生がテストを持ってやってくる。

黒縄先生 「お前家で勉強してるのか」

ソフィー 「それなりに」

黒縄先生 「悪くない点数だった。休日までわざわざ生徒の面倒を見なきゃいけないと正直げんなりしていたが」

ソフィー 「素直すぎる」

黒縄先生 「これならまあこの黒縄の時間を奪うには及第点だ。もう少し頑張れば学年一位も狙えるぞ」

ソフィー 「その称号はいらないですけど、ま、星観察する時間以外暇なんで」

黒縄先生 「ああ、就職は星の国希望だったか。まあ確かにそこなら内申点は関係ないし、このまま不登校でも問題ないだろう」

ソフィー 「先生のそういうところ好きですよ」

黒縄先生 「褒めても内申点は出んぞ」

ソフィー 「いりません」

黒縄先生 「そうか。ところでそろそろ聞いてもいいか」

ソフィー 「はい？」

黒縄先生 「誰だそいつは」

ソフィー 「あー」

黒縄先生 「妹か？」

ソフィー 「違います」

黒縄先生 「勝手に部外者を入れたらダメだろう。内申点以前の問題だぞ」

ソフィー 「気にしたことないですってば。遺失物配送で送られてきたんです」

黒縄先生 「さよなら配達で人間が？聞いたことがない」

ソフィー 「私なんです。私がいつか落とした私が返ってきたんです」

フィロ 「私はあなた。あなたがいつか落としてしまったもの」

黒縄先生 「お前、内臓でも落としたのか」

ソフィー 「だからどうやったら落とすんですかそんなもの」

フィロ 「私はあなた。あなたがいつか落としてしまった優しさ」

黒縄先生 「神様の気まぐれというものは俺たち人間には理解できないな」

フィロ 「神様は気まぐれなない」

黒縄先生 「ん？」

フィロ 「すべては決まりごと。私が」

ソフィー 「ここにいることもね。はいはい」

黒縄先生 「決まりごとか。何でもいいが、あんまり自分だからっていいじめてやった

らかわいそうだぞ。大切にしてやれ」

ソフィー 「なんですか。いじめてないです」

黒縄先生 「今日はもう帰っていい。俺も早く帰ってフィアンセの世話をしなくては」

ソフィー 「ああ、人形」

黒縄先生 「人形言うなマリアンヌだ」

ソフィー 「キューピッドはどんな気持ちで矢を引いたんだろう」

黒縄先生 「知らんがみんな幸せになあれってところだろ」

ソフィー 「う、うん」

黒縄先生 「あからさまに引くな」

生徒 「あ、こくじょー先生だ。なんか部活の顧問でもはじめたの？」

黒縄先生 「ただの休日出勤だ。もう帰るよ」

先生 「そうなんだ。バイバーイ」

黒縄先生 「はい、さようならさようなら」

ソフィー 「うっげー蕁麻疹」

黒縄先生 「なんだどうした」

ソフィー 「先生こそよく平気ですね。一体その身体で今までどれだけのさよならを

浴びてきたことやら」

黒縄先生 「初めて聞く慣用句だな。どういう意味だ？」

ソフィー 「反吐が出る」

黒縄先生 「出す前にさっさと帰れ。ああ、部活には顔出さなくていいのか。今日は

活動日だろう」

ソフィー 「いいです。仲良い子いないし」

黒縄先生 「そうか。でも今、いや、それじゃまたな」

ソフィー 「はい。ありがとうございます」

ソフィー、
教室を出る。

ソフィー 「あ、どうも」

衆合先生 「あら、こんにちは。そちらは？」

ソフィー 「えっと、妹です、妹。ついてくるってうるさくて」

フィロ 「私はあなた。無理に引き離されたあなたの一部」

ソフィー
「こういう遊びなんです。失礼します」
衆合先生
「あらあら。さようなら、気を付けてね」

黒縄先生、片付けを終え教室を出ようとする。
そこに衆合先生登場。

黒縄先生
「なんだ」

衆合先生
「彼女、例の不登校の天使さん？」

黒縄先生
「それがどうした」

衆合先生
「うふふ、ずいぶんとまあ面白いものを連れていたなと思ひまして」

黒縄先生
「あれが何か分かるのか」

衆合先生
「ええ、これでも元は遺失物配達員ですから。ああ、さよなら配達員って呼ばれてるんでしたっけね、今は」

黒縄先生
「人間が送られてくるなんて話聞いたことがない」

衆合先生
「むろんそんなもの送りませんよ。うーん、それにしても少し酷だわ。どうして返ってきてしまったのか、気になりますねえ」

黒縄先生
「あまり首を突っ込んでやるなよ」

衆合先生
「うふふ、可愛い天使たちのためなら全身だって突っ込みますわ」

黒縄先生
「あいつは他人に踏み込まれたがらないよ」

衆合先生
「さすが担任、自分の天使のことはよく分かっていらっしゃる」

黒縄先生
「気持ち悪い言い方をするな生徒と言え」

衆合先生
「うふ」

黒縄先生
「はあストレス」

衆合先生
「まあかわいそう」

黒縄先生
「そう思うならさよなら配達員にでも戻ってくれ」

衆合先生
「嫌ですわ、私、教員が天職なんですもの。ああ、私の可愛い天使たち。神様のお導きに背くだなんて出来ません」

黒縄先生
「俺が辞めるしかないのか」

阿鼻先生
「あ、衆合先生」

衆合先生
「はあい」

阿鼻先生
「探しましたよ。今度の遠足の相談に乗ってくれるって約束してたのに」

衆合先生
「ああ、そうでしたわ。すみません、3年生の職員室に向かう途中で黒縄先生を見つけたものですから、つつい」

黒縄先生
「ここ全然通り道じゃないだろ」

阿鼻先生
「しおりなんですけど、衆合先生が去年つくられたデータ、日付だけ変えてそのまま使わせてもらって良いかなあって」

衆合先生

「ええ、問題ありませんわ」

阿鼻先生

「よかった。一部刷ったんで確認お願いします」

黒縄先生

「願い事の海か。なかなかいい場所だったな」

衆合先生

「黒縄先生、いたく気に入ってましたものね。遠足のあと改めてマリアン又さんを連れて2人でお出かけしたんですっけ」

阿鼻先生

「噂の婚約者。いいですねえ」

黒縄先生

「ああ、しかしマリアン又は潮風に弱いからな。しっかりとビニールに包んであげたら彼女も喜んでいたよ」

阿鼻先生

「婚約者をビニールに入れたんですか!?!」

黒縄先生

「何か問題が?」

阿鼻先生

「問題しかなくないですか!?!」

衆合先生

「まあまあ阿鼻先生、愛の形って色々あるんです」

阿鼻先生

「そういう問題じゃないですよね!?!」

衆合先生

「はい、問題なさそうですわ。とはいえ私も前回のデータを引っ張ってそのまま使わせてもらった身ですから私が許可するのも変な話なんですけど」

阿鼻先生

「恒例行事だとそうなりますよね。ははは、みんな楽しみにしていますよ。特に女子がね。願い事の海って女子の願いを叶えやすいっていう噂があるらしいじゃないですか」

黒縄先生

「そうなのか。海の妖精最低だな」

衆合先生

「うーん、それちょおつと間違ってますけどねえ。実は願い事の海に棲む妖精って恋に関する願いしか聞き入れられないんですよ」

阿鼻先生

「あ、そうなんですか?」

衆合先生

「可愛い天使たちの夢が壊れるので言いませんけどね。恋のお願い事をする割合は女の子が多い。それで必然的に、女の子のお願い事が叶いやすいって話が広まっているというわけです」

阿鼻先生

「お詳しいですね」

衆合先生

「さよなら配達員時代は妖精にもお届けものをしていましたからねえ。他の方よりも色々な話が入ってきやすいだけですよ」

阿鼻先生

「へえ。そういえば衆合先生っておいくつなんですか?」

衆合先生

「まあ。地獄に落ちろ」

黒縄先生

「やめとけ。その話題は死人が出る」

衆合先生

「出します」

阿鼻先生

「こっわ。こっわ」

ユーシー

「あれ、衆合先生。どうも」

衆合先生

「あらあら。お帰りなさい」

ユーシー 「ただいまです。あの、今日ソフィーが学校に来てるって聞いて」
黒縄先生 「さっきまでいたぞ。ほぼ入れ違いだな」
ユーシー 「そうですか。なら部室に戻ってみます」
黒縄先生 「顔は出さないそうだ」
ユーシー 「なるほど。わかりました。ありがとうございます」

ユーシー、去る。

阿鼻先生 「彼、星の国に就職した卒業生でしたっけ」
衆合先生 「ええ、とても優秀な天使ですよ」
阿鼻先生 「帰省してわざわざ母校に顔を出すなんて良い子ですねえ。じゃあ僕はこれです。衆合先生、確認ありがとうございます」
衆合先生 「いつでもどうぞ。……願いの海。ふうむ、関係あるのかしら」
黒縄先生 「何だ？」
衆合先生 「いいえ、ベルの調子がいまいちだなあと」

衆合先生、ベルを鳴らす。

ラブ、フィロ、ソフィーが登場し、場面が変わる。

4 ソフィーの家

ソフィー 「ただいま」
母親 「おかえり。全部あった？」
フィロ 「ただいま」
ソフィー 「あったよ。チンゲン菜探すのに3件まわったけど」
母親 「最近チンゲン菜見かけないのよねえ」
フィロ 「ただいま」
ラブ 「おかえり」
ソフィー 「あれ、ラブ」
ラブ 「お使い行くなら教えてよお。電柱の陰からこっそり見守ったのに」
ソフィー 「怖いわ。幼稚園児か私は」
ラブ 「高校生児」
ソフィー 「児をつけない」
母親 「私からすればいつまで経っても幼稚園よ。ラブちゃん、晩御飯食べてく？」

ラブ
「いいんですか？お母さんに聞いてみます」
母親
「棚のお菓子適当に持ってたていいわよ」
ソフィー
「うん」

チャイムの音。

さよなら配達員の声「お届けものです」
母親
「あら」

母親、玄関へ荷物を受け取りに行く。

母親
「あ、ソフィー、ハンコ持ってきて」
ソフィー
「サインじゃだめなの？」
ラブ
「さよなら配達受け取るとき専用のハンコ」
ソフィー
「あー」

ソフィー、引き出しを開け、ハンコを玄関に持っていく。

ソフィー
「私自分のハンコどっか行っちゃった」
母親
「何言ってるの、お母さんが持つてるわよ。同じ引き出しに入ってたでしょ」
ソフィー
「見てない」
母親
「これしもうとき場所確認しときなさい。ソフィーもいつ配達くるかわかんないんだからね」
ソフィー
「んー」

2人、玄関から戻ってくる。

ソフィー
「それなに？」
母親
「どこに落としちゃったのかしら。お父さんと初デートしたときの写真」
ラブ
「ソフィーのお父さん。見てもいいですか」
母親
「ハンサムでしょう」
ソフィー
「ほんとだ」
ラブ
「ソフィー、お父さんはじめて見たの？」
ソフィー
「うん。小さい頃死んだからほとんど記憶ないし」
母親
「彼写真嫌いだったからこの一枚しかなくてね。手帳に入れて持ち歩いて

たら、うつかり落としてしまったの。でも良かった。写真立てに入れて飾るときましょ」

ラブ 「また落としちゃったら今度はもう二度と戻ってこないですもんね」

母親 「そうね」

ソフィー 「そうなの？」

ラブ 「そうだよ。神様そこまで暇じゃないよ」

母親 「あんたお父さんのこと全然覚えてない？」

ソフィー 「うーん。そうだね、んー、すごいぼんやりと覚えてる気もする」

母親 「よくお父さんの髪引っ張って困らせたのよ」

ソフィー 「悪ガキじゃん。私じゃない写真立て持ってたかも。写真借りていい？」

母親 「あらありがと。じゃ晩御飯つくるから、ラブちゃんゆっくりしててね」

ラブ 「ありがとうございます」

ソフィーの部屋へ。

ソフィー、写真を見つめる。

ソフィー 「こんなに覚えてないもんなんだね、親なのに」

ラブ 「だって幼稚園のときに亡くなったんでしょ？仕方ないよ」

ソフィー 「そうだけどさ。あーでも、お葬式したのは何となく記憶あるかも。お父

さんがいる棺がすごく遠いの」

ラブ 「棺が遠い？」

ソフィー 「うん。遠くからお母さんに呼ばれるんだけど、いやだって駄々こねてた」

ラブ 「お父さんが死んじゃったことが悲しかったんだろぅね」

ソフィー 「うん……」

窓を叩く音。

さよなら配達員 「すみません、お伝えしわすれてました」

ソフィー 「うわ、びっくりした」

ラブ 「さよなら配達員さんだ。ご苦労様です」

さよなら配達員 「どうも。ソフィーさん、数日前のお荷物、まだ受領書が確認できていませんので。期日中にいただかないとお荷物回収となりますのでお気をつけください」

ソフィー 「はい。あ、あの」

さよなら配達員 「はい」

ソフィー 「これは何ですか」

さよなら配達員

「ははは、長年やってますがはじめて受ける質問です。私共はご本人様が
かつて落としたものをお届けするのみですから」

フィロ

「私はあなた」

さよなら配達員

「彼女はあなただったものです」

フィロ

「あなたは私」

さよなら配達員

「あなたがいつか、さよならを言えたものです」

ソフィー

「内臓ですか。私内臓落としたんですか」

さよなら配達員

「そんなものどうやって落とすんですか」

ラブ

「ソフィー自分で同じツツコミしてたじゃん」

ソフィー

「何なんですか、これは」

さよなら配達員

「神様の気まぐれ、いや、決まりごと。それじゃ、受領書の件だけお忘れ
なく。不要であれば伝票は破棄していただいて構いませんので。では」

ソフィー

「神様の気まぐれ」

フィロ

「神様は気まぐれない」

ソフィー

「すべては決まりごとだから、でしょ」

フィロ

「私がここにいることも」

深夜。

テレビが流れている。

ソフィー、双眼鏡を覗いている。

ソフィー

「私があんたを受け取ったら、双眼鏡もベッドも2つ用意しなくちゃいけ
なくなるわね」

フィロ

「必要ない。私が私に還るだけ」

ソフィー

「あんた消えるってこと？」

フィロ

「消えない。私が私に還るだけ」

ソフィー

「私のなかに吸収されるってこと？」

フィロ

「何が？」

ソフィー

「何でもないわよ。ねえ、あんたはさあ、お父さんのこと覚えてる？」

フィロ

「何が？」

ソフィー

「顔も、声も、何にも、覚えてないものなのね。写真を見たときね、あ、
お父さんだなんて思えなかったな。知らない男の人。ああ、これがお父
さんなんだなって知った、そんな感じ」

フィロ

「寂しい」

ソフィー

「そうね、寂しいわね。なんだか」

フィロ

「忘れることは、寂しい」

ソフィー 「そうね、忘れることは、そうね……。どうして忘れてしまうのかしら。

ファイロ 「大切なはずなのに」

ファイロ 「そう、大切なはずなのに、忘れてしまう。それはかみさまのいじわる。

ソフィー 私があなたから引き離されてしまったのは」

ファイロ 「かみさまのいじわる？」

ソフィー 「いいえ、あなたのいじわる」

ファイロ 「なによ」

ソフィー 「怒った」

ファイロ 「怒ってないわよ。ねえ、あんたは、かみさまに会ったことがあるの？」

ソフィー 「何が？」

ファイロ 「私、もしかみさまに会ったら、ひとつだけ質問するって決めてるんだ」

ソフィー 「何を？」

ファイロ 「人は死んだらどうなるのか」

ソフィー 「どうなるの？」

ファイロ 「わからないから聞くんじゃないの。星になるなら素敵よねえ。だったら死ぬのも怖くないわ」

ソフィー 「そのこたえ、本当に聞きたいの？」

ファイロ 「……聞きたくないかもね。かみさまの決まりごとなんて、知らないほうが幸せだわ」

ソフィー 「幸せ？」

ファイロ 「うん」

ソフィー 「幸せって、何？」

ファイロ 「え、難しいこと聞いてくるわね」

ソフィー 「あなたは私がいなくては、幸せじゃない」

ファイロ 「なにそれ。私の幸せをあんたが決めないでよ」

ソフィー 「私はあなた」

ファイロ 「そうだとってもよ。私は幸せなもの」

ソフィー 「幸せって、何？」

ファイロ 「……わかんないわよ」

ソフィー、双眼鏡覗く。

ノートに書きこむ。

テレビの声 「今夜のあなたの耳のお供、夢の世界までどうぞお付き合いください……」

朝、図書館前。

ラッパを吹く青年。

そこに黒縄先生が登場。

会釈し、隣で電子タバコを吸う。

黒縄先生

「調子はどうだ」

青年

「今日はずいぶん機嫌が良いみたいです」

黒縄先生

「そうか」

黒縄先生、タバコを吸う。

青年

「電子に変えられたんですね」

黒縄先生

「ああ。紙のほうが断然美味い」

青年

「へえ」

黒縄先生

「おススメはしないがな」

青年

「されても吸いませんよ、オレにはこいつがいるんで」

黒縄先生

「ああ、死活問題か」

青年、ラッパを吹く。

黒縄先生

「タバコは副流煙が一番怖いっていうけどな、本人が一番ヤバイよ結局。吸ってる時間が違う」

青年

「間違いない」

黒縄先生

「ま、副流煙ほどはた迷惑なものもないが」

青年

「間違いない」

黒縄先生

「お前が副流煙で死んだら、捕まるかもな」

青年

「先生が」

黒縄先生

「ああ、俺が」

青年

「ははは。だったら死ねませんね」

黒縄先生

「しかしまあ、電子も悪くないよ。服につく臭いがだいぶマシだ」

青年

「マリアンヌさんも嫌がってるって仰ってましたっけ」

黒縄先生

「部屋に入る前にしっかり消臭してるんだがなあ」

黒縄先生、タバコを吸い、長く吐く。

黒縄先生

「難しいな」

青年

「お悩みですか」

黒縄先生 「尽きないよ」

青年 「人間ですから」

黒縄先生 「間違いない」

青年 「今朝、これが届きました」

青年、黒縄に手紙を渡す。

黒縄先生 「行くのか」

青年、首を振る。

黒縄先生 「もったいない気もするがな」

青年 「認めてくれとお願いしたわけじゃないですから」

黒縄先生 「それもそうだ」

黒縄先生、手紙を返す。

黒縄先生 「喉から手が出るほどほしいやつだっているだろうに」

青年 「でしょうね。でもただの紙切れです」

黒縄先生 「俺はその紙が恋しい」

青年 「（笑う）あ」

さよなら配達員 「どうも」

黒縄先生 「ご苦労さまです」

青年 「遺失物配送も大変ですね」

黒縄先生 「そっち派か」

青年 「そっち？」

黒縄先生 「俺のまわりじゃ、さよなら配達って呼ばれてる」

青年 「遺失物配送がですか？」

黒縄先生 「ああ」

青年 「それじゃなんだか、さよならを配達するみたいですね」

黒縄先生 「あながち間違いじゃないだろ。諦めのついた頃に届けてくるんだ。もう

こっちは、さよならが済んでるのにな」

青年 「神様の気まぐれですから」

黒縄先生 「決まりごとだよ」

青年 「じゃあ俺の元にこれが届いたことも」

黒縄先生 「決まりごとってことになるな」

青年 「だとしたら従うべきなんでしょうか」

黒縄先生 「寝言は寝て言え。お前が断ることも決まりごとだろうよ」

青年 「なるほど」

黒縄先生 「しかし一ミリも興味ないのか」

青年 「ありますよ」

黒縄先生 「あるのか」

青年 「ただそれ以上にこの国が好きなのです」

黒縄先生 「そうか。俺もお前たちの音色が好きだよ」

青年 「光栄です」

黒縄先生 「音楽の国にやるのは惜しい」

青年 「はは。行かない理由ばかりが増えちゃったな」

ラブ 「あれ、黒縄先生じゃん。おはよ！」

黒縄先生 「おはようございます」

ラブ 「と、ラッパの人！」

青年 「（会釈する）」

ラブ 「たまには黒縄先生と学校行こっかな」

黒縄先生 「まだギリギリプライベートだ。とっとと行け」

ラブ 「きゃーん、こわーい」

黒縄先生 「タバコくらいゆっくり吸わせてもらいたいもんだ」

青年 「人気者も大変ですね」

黒縄先生 「揶揄するな。ああ、くそ、紙が吸いたい」

青年 「我慢も体に良くないですよ」

黒縄先生 「するさ。フィアンセのためにも長生きしなきゃな」

青年 「愛ですね」

黒縄先生 「愛だよ」

青年 「では愛を祝福して、ここはひとつ」

黒縄先生 「おお」

青年、ラッパを吹こうとするが。

青年 「先生、あれ」

黒縄先生 「ん？」

青年 「ユニサスじゃないですか？」

黒縄先生 「ほんとだな。珍しいものを見た」

青年 「今日はいい日になりそうですね」

黒縄先生 「ああ」

青年、ラッパを吹く。

ラッパの音色が、ソフィーの部屋まで届く。

ソフィー、まだ眠っている。

フィロ、ソフィーの様子を見て、部屋を抜け出す。

ソフィー起きる。

リビングへ。引き出しを開け、ソフィーのさよなら配達専用のハンコを出す。

受領書にハンコを押そうとする。

さよなら配達員 「出来ないでしょ」

さよなら配達員、窓から部屋を覗いている。

さよなら配達員 「それを押せるのは受け取った本人のみだ」

フィロ 「私はソフィー。ソフィーは私」

さよなら配達員 「だったものだ」

フィロ 「私はソフィーから間違えて落とされたしまった一部」

さよなら配達員 「……ハンコはちゃんと、元の場所に戻しておくんだよ」

さよなら配達員、去る。

フィロ 「私は、間違えて落とされてしまったただけなの。私を落としてはいけない」

ソフィー、その様子をこっそりと見ている。

6 夕方の公園。

専門学校の資料を睨んでいるラブ。

ソフィー、受領書を握っている。

ラブ 「学校どこが良いかなあ」

ソフィー 「専門学校？」

ラブ 「そう。恋のキューピッド最近人気でさ、専門学校も増えてるの。増えすぎてどこが良いのかわかんない」

ソフィー 「近いところにしたら」

ラブ 「んー、でもせっかくなら街は出たいな。どうせソフィーも星の国行っち

[illegible]

「これからこれから」

「そんなの人によるでしょ」

「大丈夫だよ。ソフィーが頑張ってるってこと、ラブは知ってる」

「もし認められなかったら、一緒に専門学校行こうよ」

「キューピッドの」

「ソフィーと一緒に嬉しい」

「ソフイー結構才能あると思うんだよね」

「優しいとか」

「誰が誰の事好きって察する能力高いし」

「目がキレイ」

「なんと言ってもラブの友達」

「でしよでしよ」

「ベリーちゃん。お疲れ様」

「部活の後輩だよ」

「あー、キューピッド部。あー納得」

「キューピッド目指してる子ってみんなこんな感じなんだって感じ」

「えっへ、超嬉しいです。今塾から帰ってきたところなんですよ」

ベリー 「はい、最近通い始めて。あでも部活には影響ないので、これからもよろしく願います」

ソフィー 「塾って恋のキューピッドの？」

ベリー 「いえいえ、全然全然。親から恋のキューピッドは反対されてて、大学行って、就活はこの国でしろって。公務員になってほしいって言われてます」

ラブ 「そうなの？」

ベリー 「はい。あ、もしかして、部活も辞めなきゃダメですか」

ラブ 「そんなことないよ。部活は部活だもん。将来目指してるものが何だろうと関係ないよ」

ベリー 「よかった。恋のキューピッドにはなれないけど、部活はすごい楽しいんです。だからこれからも精一杯頑張らせてください」

ラブ 「もちろんだよ。ベリーちゃんには部長お願いするつもりなんだから、これからもよろしくね」

ベリー 「わあ、やったあ。がんばります。それじゃ先輩、また学校で。さようなら」

ラブ 「うん、バイバーイ」

ソフィー 「げえ」

ラブ 「どしたの」

ソフィー 「ただのアレルギー」

ラブ 「ああ」

ソフィー 「いいこだね。ベリーちゃんだっけ」

ラブ 「うん。いいこでしょ。絶対キューピッドになるって思ってたな」

2人、ベリーの去った方を見つめる。

ラブ 「寂しいな」

ソフィー 「そうだね」

ラブ 「それで、ソフィーはどうするの？」

ソフィー 「あー、これ？」

ラブ 「受け取るならもうポストに行かなきゃ行けないよ」

ソフィー 「でもまだわからない」

ラブ 「そっか。ソフィーにさ」

ソフィー 「うん」

ラブ 「言おうか迷ってたんだよね」

ソフィー 「何を？」

ラブ 「帰ってきてるんだって」

ソフィー 「誰が？」

ラブ 「星の国から」

ユーシー 「ソフィー？」

ラブ 「あ」

ソフィー 「ユーシー先輩」

ユーシー 「ソフィー、会えて良かった。5日前からさ、帰ってきてるんだ。一週間だけ。ソフィー、元気かい？あまり学校に行ってないって、話、聞いたけど」

ソフィー 「え、ああ、ええ。あの、元気です」

ユーシー 「そう、それならいいんだ。ラブちゃん、久しぶりだね」

ラブ 「先輩。お久しぶりです。元気ですか？」

ユーシー 「うん。えっと、そっちは」

ソフィー 「あ、妹です。妹」

フィロ 「私はあなた。あなたがかつて落としたもの」

ソフィー 「今、こういう遊びをしてて」

ユーシー 「そうなんだ。あの、放っておいて大丈夫なの？何かあった？」

ソフィー 「何がですか？」

ユーシー 「だってほら、泣いてるから」

ソフィー、フィロを見る。

ソフィー 「え、大丈夫だと思いますけど？」

ユーシー 「そう？ まあソフィーがそういうなら大丈夫なんだろうけど」

ラブ 「あ、これデフォなんで、気にしないでいいですよ」

ソフィー 「デフォ？」

ユーシー 「余計な口出しだったみたいだね。ごめん。そうだ、ソフィーは、まだ星観察は続けてるの？」

ソフィー 「はい、まあ、一応。星の国に就職したいし。まだ認められてはいないんですけど」

ユーシー 「ソフィーと一緒に働いたら嬉しいな。うん、ソフィーのことだから頑張ってるんだろうし、神様も認めてくれるさ」

ソフィー 「そうだといいんですけど」

ユーシー 「ははは、弱気だなあ。よし、よかったら今夜は一緒に観察しよう」

ソフィー 「え」

ユーシー 「それでも現役だからね。観察日記は持ってる？」

ソフィー 「あ、家に」

ユーシー 「取っておいで。待ってるから」

ソフィー 「いいんですか」

ユーシー 「もちろん」

ソフィー 「じゃあ、お願いします」

ラブ 「あーっと、ラブ、今日、早く帰っておいでって言われてるんだった」

ソフィー 「え」

ラブ 「今日はラブの大好きなハンバーグだから、つくるの手伝えって。すみま

せん先輩、また今度ゆっくりお話しましょうね」

ユーシー 「あ、うん。気をつけて」

ラブ 「ありがとうございます。じゃあねソフィー、と妹ちゃん」

ラブ、公園から出ていく振りをして端から様子を見る。

ソフィー 「じゃあ、日記、持ってきます」

ユーシー 「あ、うん。あの、ソフィー。あのさ」

ソフィー 「はい」

ユーシー 「その、あー、なんて言えいいのかな」

ソフィー 「何がですか？」

ユーシー 「その、学校に行かなくなったのは、どうしてなの？」

ソフィー 「まあ、うーん、なんとなく、です」

ソフィー 「その、僕がソフィーを振ってしまったことは、関係ないのかなって」

「あ、あー。ああ、全然。ほんとに関係ないんです。もう一年以上前です

し。あれから色々あって、ははは。先輩は一ミリも気にしないでください

い。本当。あ、あの、あの節は大変ご迷惑をおかけしました」

ユーシー 「何も迷惑なんかじゃない。嬉しかったんだ。ありがとう。今でもソフィ

ーのことは大事な後輩だと思ってるよ」

フィロ、苦しそうにしている。

ソフィー 「私も先輩のこと、今は人として好きです。だからあの時、自分のなかで

気まづいまま先輩が星の国に行ってしまったのが心残りで」

ユーシー 「良かった。そうなんだ、僕もあのままソフィーとの縁が切れてしまうの

は悲しいなって。だからこうしてまた話が出来て嬉しいんだ。ソフィー、

改めて。これからも、こんな先輩だけど、よろしくね」

フィロ、とうとう大声で泣き出す。

ユーシー 「え、どうしたんだろう。ソフィー、君の妹が」

ソフィー 「ねえ、ねえ、急にどうしたのよ。どこかいたいなの？」

フィロ 「苦しい、苦しいわ」

ソフィー 「どこが？」

フィロ 「胸が」

ユーシー 「大変だ。病気かもしれない。妹さん、持病は？」

ソフィー 「えーっとえっと、生まれてこの方病気が知らずです」

ラブ 「なにになに大丈夫？どうしたの？」

ソフィー 「あんた帰ったんじゃないの？」

ラブ 「ごめんやっぱり気になって」

フィロ 「かなしい、かなしいわ」

ソフィー 「なにが？」

フィロ 「心が」

ソフィー 「どうすれば良いの」

ラブ 「誰か呼んでこようか」

ユーシー 「それより救急車のほうが」

フィロ 「どうしようもないの。いたくてたまらない。さあ思い出して。私を落と
してはいけない」

フィロ、ソフィーに手を伸ばす。

波の音が聞こえる。

フィロ 「つらいから捨てたのね。願ったんでしよう、こんな気持ちはなくなっ
てしまえと。そうして私はあなたから落とされた」

ソフィー 「違う」

フィロ 「私はあなた。あなたが落としてしまったもの。私はあなたの優しさ。あ
なたの苦しさ。あなたのつらさ。あなたの幸福。私を落としてはいけない」

ソフィー 「違う」

フィロ 「私を落としてはいけない」

ソフィー 「違う」

フィロ 「あなたは願った。だから私はあなたから落とされた」

ソフィー 「違う。ごめんなさい。違うの」

フィロ 「私はあなた。あなたがいつか落としてしまったあなたの一部」

ソフィー 「ごめんなさい」

フィロ 「思い出して」

オカン 「神様もホンマ野暮やなあ。ほらソフィーちゃん、飲み込まれたらあかんよ」

水の音が弾ける。

ラブ 「オカンさん」

ユーシー 「オカン」

ソフィー 「おお、ユーシーくんか、久しぶりやなあ。星の国はどうや？」

ユーシー 「いいところです。オカンもミカンもお変わりないようで」

ソフィー 「オカン」

オカン 「ほらミカン、ユーシーくん近づいたらあかんよ」

ユーシー 「ごめんねミカン、ぼく犬アレルギーなんだ」

オカン 「ほらおすすめおすすめ。オカン今からかつこいいこと言うから邪魔したあかんよ」

ソフィー 「水の音がしたの。オカン。あの海だわ。オカン、この子は」

オカン 「うん。厄介やなあ。この子は寂しんぼやからなあ」

フィロ 「私を落としてはいけない」

オカン 「それはちゃうで。人はみなアンタを何度も何度も落として、そのうち落としたことにさえ気がつかんようになる。それでふとしたときに、ああ、何かここにええもんがあった気がするなって無性に切なくなるねん。それが大人になるっちゅうことや」

ユーシー 「オカン。ソフィーの妹さん苦しそうなんだ」

オカン 「せやろな」

ユーシー 「救急車を呼ぼうかって話してて」

オカン 「そんなもんいらんよ」

ユーシー 「でもまだこんなに小さいし、何かあったら大変だよ」

ソフィー、フィロを見る。

ソフィー 「小さい？」

ユーシー 「ああ。まだ5歳くらいだろう？」

ソフィー 「いえ、そんな」

ユーシー 「ずっと涙ぐんでいるから、最初はもしかして君と喧嘩でもしたんじゃないかって心配してたんだ。でももしかしたら、体調が悪かったのかもしれない」

フィロ 「心配してくれてたのね。優しい。大好き。大好き」

「やめて、違う、やめて」

「大好き。苦しい。どうして私のことを好きになつてくれないの。それだけ優しいのに。どうして。苦しい」

「違う。その優しさを勘違いしちゃいけない。勝手に勘違いして勝手に絶望したのは」

「私」

「あなた」

「いいえ私たち」

「違う。あんたはもうソフィーちゃんの一部やない」

「苦しいの」

「私が願ったからだ。私が、こんなものいらなからなくしてくださいってお願いしたの。だから来ちゃったんだよ。ごめんね、帰ってきていいよ。受領印、押すから」

「ほんとにそれで良いの？」

「いいよ。だって私なんだもん」

「ソフィーちゃん、それはな、みんなそのうちに忘れていくもんや。自然の理なんよ」

「私だけズルして忘れるわけにはいかない」

「ズルなんかじゃない。苦しんだこと、私知ってるよ。ようやく手放せたんでしょう。私はソフィーに、今のソフィーを大切にしてほしいよ」

「でも、この子のことを、見捨てられない。無理やり私から引き剥がれたなんて、かわいそうだよ」

「お届けものです」

「わ、びっくりした。びっくりしすぎた」

「さよなら配達員さん？なんで？」

「特別出張サービスです。元同僚のよしみで、今回だけです」

「手紙？」

「受け取りのサインは不要です。仕事じゃないので。では」

「あ」

「誰からの？」

「集合先生だ。願い事の海でお待ちしています。集合先生、今海にいつてこと？」

「行ってみよう」

「本気？」

「だって先生はいるんですよ？」

「でも、行ってしまうのよ」

ソフィー

フィロ

ソフィー

フィロ

ソフィー

フィロ

オカン

フィロ

ソフィー

ラブ

ソフィー

オカン

ソフィー

ラブ

ソフィー

さよなら配達員

ソフィー

ラブ

さよなら配達員

ソフィー

さよなら配達員

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

ソフィー

ラブ

「そんなの行かなきゃわかんない。でも先生が来いってことはなんかあるんだよ、きつと。先輩ごめんなさい、ソフィーお借りします」

ユーシー

「あ、うん、あつ、今から行くの？ぼく着いていこうか、暗くなると危ないし」

ラブ

「いえ、これは乙女の問題なんです。オカンさん、行ってきました」

オカン

「ええんちゃう。氣いつけてな」

ラブ

「はい。ソフィー行くよ。いざ、何があるか分かんないけど何かあるっぽい願い事の海へ！」

ソフィー

「ラブ、ラブ！ねえここから1時間ぐらいかかるじゃん」

ラブ

「先生待ってるから」

ソフィー

「もう、もう、衆合先生も何があるかくらい書いというてよお」

ソフィー、ラブに背中を押されて走る。

5 祖母の葬式

水のなかで、ガタンゴトンと音が鳴っている。

ソフィーの母親が登場。棺を見つめる。

母親

「ソフィー、こっちおいで」

ソフィー登場するが、近づこうとしない。

ソフィー

「いや」

母親

「もう焼かれちゃうのよ。顔、見れなくなっちゃうよ」

ソフィー

「見なくていいよ」

母親

「最後なんだから、しっかり見てあげて」

ソフィー

「どうして？」

母親

「どうしてって。ソフィーだって、おばあちゃんの顔忘れたくないでしょ」

ソフィー

「忘れない。呼吸して、まばたきして、声を出して笑って、苦しいって泣いてるおばあちゃんを死に顔で上書きさせない。忘れないために私は見ないの」

母親

「じゃあせめてそこからでも良いからお別れを言ってちょうだい」

ソフィー

「言わない。心のなかでいつだって会えるのに、どうして別れを告げなきゃいけないの。私のなかのおばあちゃんまで死なせない。さよならは言わない」

母親

「どうしてあなたはいつもそうしてさよならをしてくれないの。ほら、なんて安らかな顔。さようなら母さん」

登場人物が次々と出てきて、棺を囲みながら「さようなら」を発する。

ソフィー 「さようならを言わないで」

ソフィー、泣く。

ソフィー 「言わないでよ」

フィロ、ソフィーに近づき、そっと抱き締める。

ソフィー 「ユーシー先輩……」

ラブ 「ユーシー先輩？」

電車のなか。

ソフィー 「あ、ううん。ごめん、なんかおばあちゃんのお葬式のこと思い出しちゃって」

ラブ 「平気？」

ソフィー 「もちろん。あのときはさ、確かにまだまだユーシー先輩のこと好きだったな」

ラブ 「そっか」

ソフィー 「辛いとき側にいてよって思うくらいには」

ラブ 「お。ラブはソフィーが辛いときもハピハピなときもなんと側にいちゃうよお」

ソフィー 「ありがとう」

ラブ 「ラブちゃんは愛の化身だからね」

ソフィー 「あながち間違いじゃないよマジで」

視界が変わる。

ソフィー 「あ」

ラブ 「見えてきたね」

ソフィー 「うん。願い事の海だ」

波の音。

衆合先生 「お待ちしましたよソフィーさん」

ラブ 「衆合先生！」

衆合先生 「こんばんは」

ソフィー 「手紙受け取りました。あの、どうして先生が？」

衆合先生 「全身突っ込もうかと」

ソフィー 「はい？」

衆合先生 「（妖精に）こちらが私の天使たちです。かわいいでしょう。それで、ど

うですか？うーん、やっぱり」

ラブ 「誰かいるんですか？」

衆合先生 「海に棲む妖精ですよ」

ソフィー 「えっ、今ここにいるんですか？」

ラブ 「うっそーやばい」

衆合先生 「見えないのも当然です。あなたたちは天界の業務に携わったことがあります

ませんか」

ラブ 「じゃあラブちゃんは、そのうち見えるようになったりするんです

か？」

衆合先生 「無事キューピッドになればね」

ソフィー 「先生、ここに何があるんですか？」

衆合先生 「はい？」

ソフィー 「何かあるから呼んだんですよね」

衆合先生 「ええ、そりゃここには海がありますね」

ソフィー 「そうじゃなくて、この子に関係する何かがあるんでしょう」

衆合先生 「なにも」

ソフィー 「え？」

ラブ 「え？」

衆合先生 「言っていたでしょう、無理やり引き離されたって。だから私はてっきり

あなたがこの海にお願いでもしたんじゃないかと思ったんです」

ソフィー 「そうです」

衆合先生 「ソフィーさん。あなたは、さみしがり屋なんですね」

ソフィー 「どういう意味ですか？」

衆合先生 「ここまでのさみしがりもなかなかいません」

ソフィー 「なんですか。別に人並みですよ」

衆合先生 「うふふ。まあ。そんなこと言っただってこの子が物語ってますから」

ソフィー、フィロを見る。

衆合先生

「でも手放せた。もうさよならしていいんですよ」

ソフィー

「その言葉は言わないで」

衆合先生

「本質を見失ってはいけません。あなたはさよならという言葉が怖いのではない。まだ区切りの着いていないものに対して無理やりさよならをさせられるのが怖いだけ。ソフィーさん、あなたはとくに、その子にさよならを言えたはずですよ」

フィロ

「違う。私は無理やりさよならをさせられた。私は私の元へ還らなければならぬ」

衆合先生

「いいえ、あなたはもうソフィーさんではありません。ソフィーさんだったものです。彼女はね、いえ、私たちはね、あなただけをずっと抱いては生きていけないの」

フィロ

「私を忘れてはいけません」

衆合先生

「忘れるわけじゃないじゃないですか。この先私たち、何度だって違うあなたを産むんですよ」

ソフィー

「あっ」

衆合先生

「あ？」

ソフィー

「キュン死に一生」

衆合先生

「九死に一生？」

ソフィー

「はは、ラブ、キュン死に一生だよ」

ラブ

「やっぱ座右の銘として欲しくなった？」

ソフィー

「それはいい」

ラブ

「なによ」

ソフィー

「先生、いいんです。私、願ひ事の海にお願いして、ズルしてなくしちゃったんです。だから、もう一回受け入れようと思って。それで今度こそ」
「それは違います。言ったでしょう、その子に関することは、なにも、なかったんですよ。さっき聞きましたけどね、ここに棲む妖精たちに来る仕事はたったひとつなんですって」

衆合先生

ラブ

「仕事？」

衆合先生

「ええ。応援ですよ」

ラブ

「応援？」

衆合先生

「キューピッドが矢を引く。恋に落ちる。どうにか成就させようと、この海に願う。そうして妖精たちが、恋のお手伝いをするんです。キューピッドのお仕事は心を動かすこと。妖精のお仕事は、恋の後押しなんですよ」

ラブ 「へえ〜！勉強になるう！」

ソフィー 「だって、それじゃあ」

衆合先生 「それは専門外なんですって。だから言ったでしょう。あなたは随分なさ
みしがり屋さんなんですよ」

フィロ 「違う」

ソフィー 「願ったからじゃないんですか」

フィロ 「違う」

衆合先生 「そう。なんてことはない、あなたの心の働きです」

フィロ 「苦しい。苦しいよお。置いていかないで。私を捨てないで。私を失くし
てはいけない」

フィロ、ソフィーを海のなかへと引っ張る。

ラブ 「ソフィー！」

2人、海の底へと沈む。

水中。

ソフィー、もがく。

水面に上がろうとする。

ソフィーの腕をユーシーが掴む。

フィロ、ユーシーの腕を抱き寄せる。

ソフィー、ユーシーを抱きしめる。

苦しむ。

口から気泡が絶え間なく出ていく。

ソフィー、そのうちに、泣きながらユーシーと離れる。

フィロ、ソフィーへと腕を伸ばす。

しかしユーシーから離れられず、浮上していくソフィーを見送る。

ソフィー 「ぶはっ」

ラブ 「ソフィー！」

衆合先生 「あらあら、何か拭くものあるかしら」

ラブ 「大丈夫？」

ソフィー 「うん」

衆合先生 「（ハンケチでソフィーを拭く）」

フィロ 「待ってえ」

海からフィロ、出てくる。

フィロ

「私を捨ててはいけない。捨てないで。置いていかないでえ。置いていかないでよお」

ソフィー

「置いていかなきゃ。ごめんね。さみしいよね。でも大人になっていつちやうの。私、いつの間にか、あなたにさよならが言えていたんだね」

フィロ

「さよならを言わないで。帰らせて。私は間違っただけなの。

ソフィー

「さみしいよお。ユーシー先輩、どうして私を好きになってくれたの。大好きなのに。忘れてはいけない。私を忘れてはいけない。あーん、あーん」
「見て。今日は星がよく見えるわ。ねえ、私ね、最初は星なんてこれっぽっちも興味なかった。星なんかよりもユーシー先輩を見ていたかった。先輩と話がしたかったから、星のことを勉強した。観察するようになった。そうして、好きになった。ユーシー先輩と同じくらい、星のことも。

あの頃は星を見るだけで先輩のことを思い浮かべてたわね。でもね、段々それがなくなっていく。星を見ても先輩のことを思い出さなくなっていく。今でもときどき、無性に恋しくなることはあるわ。でもそれは残像よ。好きという気持ちの残像。さよならをしたはずの残像であって、今の気持ちではないの」

フィロ

「失くさないで。置いていかないでえ」

母親

「ほらソフィー、パパにさよならを言いなさい」

フィロ

「どうして？」

母親

「もう二度と会わないからよ」

フィロ

「いやだ」

母親

「さよならをしてちょうだい」

フィロ

「いやだ。さよならをしてしまったら二度と会えないでしょう。だってさよならなんて言わない」

母親

「お願いだからしてちょうだい。さよならを言わなくても、パパには二度と会えないのよ」

フィロ

「言いたくないよお」

母親

「わがまま言わないで。ほら、パパのお顔を最後によく見てあげてちょうだい」

フィロ

「やだよお。あーん、あーん」

母親

「どうして。ああ、ソフィー。ほら、パパのお顔を見て。さよならをしてちょうだいな」

フィロ

「見たくないよお。ねえお母さん、私さよならなんて言いたくない」

ユーシー 「ソフィー、僕は星の国へ行くんだ。どうか星の観察を続けてほしい。元

気でね、さようなら」

母親 「ほら、もうパパもおばあちゃんも行ってしまう。はやくさよならを」

ユーシー 「さようならを」

フィロ 「さようならを言わないで」

ソフィー 「大丈夫よ。辛かったよね、大丈夫。さようならは怖いものなんかじゃない」

フィロとソフィー、深く深く抱き締め合う。

夜が去り、朝がくる。

衆合先生 「ふふふ、神様ったら、お茶目が過ぎますわよねえ。どうしよう、私

たちのも帰ってきちゃったりしたら」

ラブ 「ラブならハンコ押しちゃうかも。先生は？」

衆合先生 「さてねえ。ま、残念ながら私は私の元に帰ってきたいなんて思うほど寂しがりやでもなければ、全身全霊で恋したこともありませんか」

ラブ 「え、先生のコイバナ、聞きたい！」

衆合先生 「可愛い天使の頼みとはいえそれはちょっと」

ラブ 「ちえ」

衆合先生 「でも聞く分には大歓迎。ラブさんは全身全霊の恋、ありますか？」

ラブ 「幼稚園の頃はイケくんが超好きだったけど、それからはまだキューピツドの矢刺さってないかなあ」

衆合先生 「刺さる前に刺す側になるかもしれませんわね」

ラブ 「刺しまくっちゃうぞお。でもラブ、やっぱ全力で恋もしたいなあ」

衆合先生 「ソフィーさんは」

ソフィー 「はい？」

衆合先生 「恋したいですか？」

ソフィー 「どうでしょう。今は星のことで頭がいっぱいです」

衆合先生 「そうですか」

ソフィー 「でも、いいものだってことは分かりすぎてます。苦しいけど、とっても幸せで、彼のことを好きになって良かったって心から思えますから」

衆合先生 「それほど好きだったんですね」

ソフィー 「ええ、大好きでした。全てを投げ出しても良いと思えるほどに」

衆合先生 「大好きだった、んですね」

ソフィー 「大好きでした。それだけは確かです」

衆合先生 「うふふ。黒縄先生、あなたのところの天使、とっても良い顔をしていま

したよ」

黒縄先生

「俺の生徒に勝手に会うな」

衆合先生

「あらお節介でしたかしら」

黒縄先生

「アイツなら平気だったさ」

衆合先生

「でも心配していたんでしよう」

黒縄先生

「当たり前だろう。心配くらいはする」

衆合先生

「不器用ですこと」

黒縄先生

「いいんだよ。お前には分からないだろうがな」

衆合先生

「うふふ。んー、ベルの調子も良いですわ」

衆合先生、磨き上げたベルを満足気に鳴らす。

ラブ

「何見てんの？」

ソフィー

「録画。最終回見れなかったから」

テレビの声

「私、もう振り向かない。今ここで呼吸してるんだって、堂々と胸を張って言いたい。だからさよなら、私の恋心。確かに好きでした。大好きでした。さようなら」

ラブ

「これ前言ってたドラマ？」

ソフィー

「うん」

ラブ

「ほらあ、やっぱいいやよいやよも」

ソフィー

「好きではないわよ。最後だけ見ないって後味悪いじゃない」

ラブ

「ふうん」

ソフィー

「あのね、見たらわかるから。ありきたりな恋愛ドラマ。チープなセリフ。

ラブ

「頭空っぽで見れるってのが唯一の良いところね」

ソフィー

「いいじゃん。ラブ、ありきたりな恋愛ドラマ好きだよ」

ラブ

「そうなの」

ソフィー

「だって現実にはほとんどありえないじゃん。フィクションくらいは幸せが良いよね」

ソフィー

「それもそうね。ラブの好きなもの否定してごめん」

ラブ

「いいよー」

ソフィー

「ありがと」

ラブ

「ユーシー先輩、星の国に帰ったってさ」

ソフィー

「そっか」

ラブ

「ソフィーの心配してた。私にソフィーのことよろしくだって」

ソフィー

「本当に優しい人なんだから」

ラブ

「好きだったんだね」

ソフィー 「うん、好きだったよ」

ラブ 「うふふ。ラブね、恋のキューピッドになったら、ソフィーに弓を引きたいな。とっても素敵なのを好きになるように」

ソフィー 「でもそれキューピッドが選べるわけじゃないでしょ」

ラブ 「うん。でも神様の気まぐれは、きっとソフィーを幸せにしてくれるって信じてるから」

ソフィー 「私はそんなラブが幸せになりますようにって願ってやまないよ」

ラブ 「きゃーん。じゃあお互いの幸せ祈願のために願い事の海まで行っちゃおう」

ソフィー 「また？ 今から？」

ラブ 「思い立ったが吉日だよ」

ソフィー 「ちよっと遠いよ」

ラブ 「星の国よりは近いじゃない」

ソフィー 「そうだね。うん、近い。すごく近い」

ラッパの音。

ソフィー、ポケットから伝票を取り出し、投げ捨てる。

フィロ、登場。ソフィーと見つめ合う。

ソフィー 「恋だ。あなたは私の恋心だ。忘れることがわかったものだ。忘れられないことがわかったものだ。さよならをすることが寂しかった恋心だ。わかっている。私がかつて抱いていたこれはもう残像だ。私は残像の恋が、己のなかから完全になくなくなることがあまりにも切ないのだ。それは私を構成していた一部だったから。まるで私がしぬような気持ちになる。恋を忘れるというのは、お葬式なんだ。私のせいかから、愛おしい人がいなくなる。送り出す、儀式なんだ。私は何度でもあなたを落とす。落として、そのうち持っていたことさえ忘れてしまう。でもそれで良いの。そうやって私は少しずつ大人になっていく。でも大丈夫。落としても忘れても私は何度だって違うあなたを産むわ。何度だって。それが神様の気まぐれ。いや、決まりごとだから。雨が降り、いのちが芽吹き、やがて枯れゆくように。生き物は必ず何かを失う。そうしてわたしは生きていくの。ありがとう、私のところへ帰ってきてくれて。さようなら、私の恋心。私だったもの。私の残像」

フィロとソフィー 「私はさよならの残像」

テレビの声 「ご視聴ありがとうございます」